

美術

◆豊嶋康子展（ガレリアフィナルテⅡ名古屋市中区大須、27日まで。日、月曜休み）

どちらが表で、どちらが裏？

大小さまざまな画材の木製パネルが、手前に傾いて壁に並ぶ。「パネル」シリーズ。絵のあるはずの

表面には、何も描かれていない。

裏をのぞくと、幾何学模様の木の骨組みがある。のっぺりしたベニヤ板の表面と、過剰なまでに複雑な裏面とのギャップにおかしみが漂うが、見ているうちに心細さにも襲われる。これまで自分が気にも留めてこなかったものごとの裏には、いったい何があったのか。

六シリーズを展示する。

「フィールドの外側が気になる」と豊嶋は話す。一九六七年、埼玉県生まれ。東京芸術大在学中の九〇年から、文具など身の回りのものを使い、批評性に富んだコンセプトチュアルアートを発表してきた。本展では、近作を中心に

大型の作品「前例」Ⅱ写真Ⅱ

は、天井からぶら下がる手描きの地図に、人名の書かれた短冊がびっしり垂れ下がる。戦時中に唱えられた「大東亜共栄圏」のエリア。短冊の名前は、そのころに地図の場所を訪れた日本の画家だ。同じような毛筆文字が伝えるわずかな情報から、画家それぞれの人生への想像が広がる。（中村陽子）

